

## 馬場辰猪『日本文典初歩』における練習問題の考察

A Study on Exercises in “An Elementary Grammar of  
the Japanese Language” by Tatsui Baba

金沢 朱美

Akemi KANAZAWA

**Abstract**

In 1873, Tatsui Baba (1850–1888) published a spoken Japanese grammar book in London. The book seemed to have been influenced by the Ollendorff method in the way exercises were developed. The book was indeed a fresh novelty in those days.

For the last 50 years Modern Japanese textbooks have been developed in eclectic methods, between direct and the Audio-lingual method. In Baba's exercises, similarities to the above method can be observed not only in its strong points but also in the weak points. The strong points were the method which made it easier for the learners to understand the grammar structure better and the acceleration of memorization and fluency of utterance acquired through piles of sentence patterns practice used in the exercises. The weak points were that the exercises were boring, childish and not interesting.

In this paper, I would like to analyze and review Baba's exercises in comparison with other texts such as Aston's (1869, 1871), Satow's (1873) and the “Nihongo-no-Kiso” (1972) with regards to their similarities.

**キーワード**：口語文法、オレンドルフ教授法、プラクティカル・アプローチ、  
繰り返し練習、直訳

**Key Words**：colloquial grammar, Ollendorff method, practical approach, repeat practice,  
word-for-word translation

## 1. はじめに

馬場辰猪（1873）『日本文典初歩』における練習問題は“practical approach”としてのオレンドルフ教授法の影響を受けた痕跡が見られ、当時としては斬新さを示している。

近年50年間ほどにおいて、直接法とオーディオリンガルメソッドの折衷法から開発され、現在も盛んに使用されている日本語教科書における長所（文型積み上げ法による容易な文法理解および暗記促進ならびに発話の流暢さ等）が相似しているばかりでなく、短所（不自然な日本語である、ドリルに面白みがない、成人が実践するには抵抗感がある等）すらも酷似している。

1888年、米国において出版された第2版では更に20課分の練習問題が加えられ、初版の教科書としての特徴が一層明確になった。初版練習問題の方法が広く受け入れられていることを示すものである。

本稿では初版を使用して練習問題を分析し、オレンドルフ教授法における練習問題、『日本文典初歩』と同年代に刊行されたアストン（Aston 1869, 1871）『日本口語小文典』ならびにサトウ（Satow 1873）『会話篇』の例文を比較考察し、さらに1970年—80年代の日本語教科書『にはんごのきそ』<sup>(1)</sup>の練習問題にも参考として言及し、『日本文典初歩』の練習問題の特徴を結論付けたい。

## 2. 練習問題の考察

### 2.1 練習問題考察までの経緯

馬場辰猪『日本文典初歩』についての考察は金沢（2008b）<sup>(2)</sup>に詳細を述べた。金沢（2008b）では、馬場辰猪は、森有礼の簡略英語国語化論に反駁して、留学中のロンドンにおいて英文にてわずかな期間に書き上げたこと、海外の英語圏（英米）で反響を呼び、2版、3版が刊行されたこと、山田孝雄が後に高い評価を与えたこと、『日本文典初歩』は日本人による初めての口語日本語の文法記述であり、かつ外国人学習者のための日本語教科書であること、その特徴として今日の日本語教育とも同じ口語動詞3分類法を採用していること、西洋人日本語研究者の影響—特にアストンとはほぼ同じ動詞分析の視座の獲得—を受けているであろうこと等を考察した。『日本文典初歩』出現の背景については、生育的環境ならびに教育的環境、社会的環境からの考察を通して考えた。更に、日本語ならびに英語での講演活動が馬場の口語能力を上達させた一つの要因であろうことを考えるために、馬場の日本語能力および英語能力を考察した。日本語については、残存する日記の日本語部分や周辺の人々（弟や当時の新聞記者らの馬場の言語能力に対する評）による証言等から、英語については、ボールハチェットの論文<sup>(3)</sup>を参照した。

馬場の『日本文典初歩』は口語の力を信じ、口語で人々を啓発しようとした馬場の信念の証であったように思われる。本稿では、上述の金沢（2008b）に引き続き、口語日本語を習得しようとした外国人日本語学習者のために、馬場が作成した練習問題の性格について日本語教育の視座から考察するものである。

## 2.2 練習問題の構成

『日本文典初歩』初版(1873)は日英対照の練習問題から成っている。初版本全108頁のうち、45頁から108頁までが練習問題である。馬場は練習問題を100課に分けている。50課は日本語文、他の50課は英語文の練習問題である。文法説明の項目も含め、『日本文典初歩』全体で単語は約426語、その内、名詞は約169、動詞は約55、イ形容詞は約26、ナ形容詞は約8出現する。名詞と動詞の内訳は以下の通りである。単語の意味を示すため、馬場のローマ字表記を漢字とかなに改めた。( )内は稿者による注記である。

名詞：男、夫、僧、やもめ、甥、花婿、旦那、女、女房、尼、後家、姪、花嫁、婦人、男の子、雄鶏、帝、王、女の子、雌鳥、女帝(によてい)、女王(にようおう)、山城屋、大和屋、日夜、病(やまい)、元(もと)、箱、ところ、石、兄弟、せがれ、友達、娘、書物、庭、方、人、時計、馬、傘、包丁、手紙、浅草、江戸、神奈川、今日(こんにち)、今朝(こんちょう)、昨日(さくじつ)、毎日、母、父、ロンドン、おじ、子、家(いえ)、木、花、犬、猫、町(街)、月、星、日(ひ)、うち(home)、りんご、梨、部屋、机、こしかけ、年(ねん)、月(month)、時(とき)、鶏、雀、魚、山がら、鴨、池、川(河)、神、世界、海、丘、金(かね)、人民、日々(にちにち)、港、パン、肉、酒、水、砂糖、墨、昼前、箱、靴、石筆、茶、手袋、一番、町人、山、鳥、日曜日(にちようにち)、月曜日(げつようにち)、火曜日(かようにち)、水曜日(すいようにち)、木曜日(もくようにち)、金曜日(きんようにち)、土曜日(どようにち)、家来、下女、反物、羽織、櫛、以前、今、ことば、エギリス(イギリス)、着物、明日(みょうにち)、明晩(みょうばん)、明朝(みょうあさ)、話、新聞、雨、雪、絵、毎朝、こと(matter)、病気、気、細工、芝居、芝居屋(theatre)、寺(church)、仕立て屋、靴屋、新聞紙、昨夜、とんび、学校、果物、みかん、歌、イギリスことば、フランスことば、書物屋、価、色、反物屋、雨天、絹、さじ、しゃぼん、手拭い、国、家内、蒸気船、蒸気車、おっかさん、おっとさん、父さま(ちちさま)、朝飯(あさめし)、昼飯、晩飯、おば

動詞：打つ、帰る、やる、取る、眠る、投げる、見える、読む、できる、座る、持っている、失う、見出す、行く、受け取る、見る、送る、おる、好く、買う、売る、する(値が掛かる)、こしらえる、会う、食べる、飲む、嫌う、話す、来る、聞く、走る、誇る、溶ける、考える、尋ねる、起きる、見る、落ちる、する、教育する、存ずる、狂う、感ずる、待つ、歌う、好む、書く、参る、忘れる、約束する、渡す、問う、乗る、変える、済む(finish)

馬場の選んだ単語はいずれも当時の日常生活に密着した生活語彙であることがわかる。

日常生活の基本的な語彙800語が日本語能力試験4級の習得レベル、海外技術者研修協会編集の『にほんごのきそⅠ』(1972)に収められた語彙が約785語であるから、『日本文典初歩』はおよそその半分強の語彙である。抑えられた語彙数でごく基本的な文の形の口頭習得をめざ

す方法は直接法やオーディオリンガル法に似て近代的ともいえる。

例としてLXXVII課の練習を見てみよう。

### LXXVII

Tokeru, to melt

Okiru, to get up

Kangaeru, to think

Miru, to see

Taduneru, to seek

Otiru, to fall

### Indicative. Present.

Tokemasu, melt or melts.

Kangayemasu, think or thinks.

Tadunemasu, look for or looks for.

Okimasu, get up or gets up.

Mimasu, see or sees.

Otimasu, fall or falls.

Tokemasen, has or have not melted.

Kangayemasen, has or have not thought.

Ame, rain.

Itti zi, one o'clock.

Yuki, snow.

Ni zi, two o'clock.

Maiasa, every morning.

Hatti zi, eight o'clock.

Miniti, every day.

Tenki, weather.

Attakani, warm.

1. Nan doki ni anata wa maiasa okimasu ka. 2. Watakusi wa maiasa hatti zi ni okimasu. 3. Nani wo anata wa mainiti mimasu ka. 4. Watakusi wa mainiti shomotsu wo mimasu. 5. Tenki ga attakani gozarimasu kara yuki ga tokemasu. 6. Anata no tomodati wa mainiti anata no kiodai wo mimasu. 7. Konniti wa attakani gozarimasu kara yuki ga tokemasu. 8. Anata wa nani wo kangayemasu ka. 9. Watakusi wa shomotu wo kangayemasu. 10. Anata no musume wa nani wo tadunemasu ka. 11. Watakusi no musume wa shomotu wo tadunemasu. 12. Anata no tomodati wa mainiti nandoki ni okimasu ka. 13. Watakusi no tomodati wa maiasa hatti zi ni okimasu. 14. Yuki ga tokemasen. 15. Watakusi wa konniti tomodati wo mimasen.

### LXXVIII

1. At what time do your friends get up? 2. They get up at eight o'clock. 3. What does your

brother look for? 4. My brother looks for (his) books. 5. What do you think of? 6. Do you see your friends every day? 7. I see my friends every morning. 8. I think about (my) books. 9. Do you get up every morning at eight? 10. I get up at eight every morning. 11. Do your daughters see books? 12. My daughters see books. 13. I do not see your friends. 14. I do not look for books.

LXXVII 課において先ず、その課で習得させようとするねらいの動詞を、辞書形（不定詞）で提出する。次に同じ動詞のます形ならびにません形を提出し、実際に現在形で平叙文と否定文の作りかたを示し、産出する際には人称は関与しないことを簡潔に示している。その後にその課での関連語彙が更に提出され、練習問題に入る。練習問題の例題は、上に提出されたばかりの単語か前の課で既出の単語から構成されている。馬場によって示された練習問題の段階は実に緩やかで、提出単語を極力抑えて、繰り返し同じ文の骨格をもつ例題を提示することによって、文の構造を理解—練習—記憶—産出の順序で習得させるには大きな効果が期待できるのである。馬場が文の構造把握と産出のために口頭練習を期していたことは明らかである。

LXXVIII 課においては同じ意味の英語文を配置し、英語→日本語へという、逆方向からの習得を期待している。以上の2課が1セットになり、目的語をもった動作動詞の使い方や、自動詞の叙述を表す文の作り方や、理由を表す接続助詞を使う従属節をもったやや複雑な文の作り方の練習等が展開されている。

### 2.3 オレンドルフ教授法の影響

オレンドルフ教授法の実際について金沢（2006, 2007）<sup>(4)</sup> から抜粋すると以下のようにまとめられる。

オレンドルフの“The Book of Learning English in Six Months”（以下“Learning English”）は明治21年（1888）、井上勤によって『六ヶ月間英語卒業書』として日本語訳を施され、刊行された。“Learning English”ではHave you?の構文から始まっている。全体的に短い会話を構成する文で成り立っており、繰り返し基本が練習できるようになっている。「文型」ということばに対する認識の明確化は、1930年代に見られ、1942年には青年文化協会による『日本語基本文型』が出現するが、それ以前からもオレンドルフによる“Learning English”においては文型の萌芽的な文の骨格を強調した繰り返し課題の積み上げ練習が多く見られていた。

疑問文と平叙文が交互に配列されており、問答法による練習が軸になっている。日常生活に密着した語彙が使われており、文法訳読教授法と呼ばれていてもpractical approachと評されていたように、オレンドルフが旧態依然の古典的文法訳読法ではなく、学習者の会話の習得をもめざしていたことが明白である。自習できるよう単語の使い方や文法が詳述されているところは文法訳読法であるが、会話習得に比重をかけていたことが窺える。

核となるのは問答法である。質問形と答えの形がほぼ同じであるから、教師の質問に対して、

学習者が簡単に解答を再生できるように配慮した点、言い換えると文の構造を強調している点は構造主義的なアプローチに近いものを感じさせる。

長沼(1981)はオレンドルフ教授法を、直接法と昔の翻訳法の間で、たくさんの文法上の練習があり、日常の言葉をできるだけ反復し練習させることにより熟達をねらっているとした。問答法と自由会話の違いを詳説して、オレンドルフ式の問答法を意味あるものとして評価している。

現在の文型積み上げ法のようにすっきりした練習にはもろんなっていないが、最終的に会話をめざした教授法はその後のドリル出現に影響を与えたようである。当時としては斬新で、現在も盛んに使われている文型練習に連なっていく教授法をオレンドルフが不鮮明ながら考えていたことが窺われる。膨大な量の問答法による練習のなかに文型練習の萌芽や後のオーディオリンガル教授法における「過剰学習」の特徴も見られる。

欠点として批判される点はHowatt<sup>(5)</sup>によって指摘されている。「平叙文(答え)の文構造が疑問文(質問)の構造に密接に関わっているが、本当は答えるべきだとか答えたい形とは余り関係がなく、疑問文と解答文との間の僅かな違いについて、オレンドルフが言及していることは不鮮明である。一種のcueシステムにも見えるがその機能は不明瞭である」「変わった質問である」<sup>(6)</sup>等である。オレンドルフにおける「私ハヒモジウゴザイマスカ」「アナタハヒモジウゴザイマス」「アナタハヒモジウゴザイマセン」等の、練習とはいえ、いかにも意味の無い質問は『日本文典初歩』にも多く見られる。LIにおける12. Anata wa anata no neko wo urimasita ka. 13. Watasi wa watakushi no inu wo urimasita. というような質問である。

以上オレンドルフ教授法について述べたが、『日本文典初歩』は構成と方法において、オレンドルフの教授法と相似している点が多い。構文が「わたしは・・・をっています」から始まっているのもオレンドルフの構文導入順序と全く同じである。発音に対する指導においても同じ発音を含む語を並べて理解、練習させるというオレンドルフの方法を採用している。文法書としてではなく、教科書としてのありかたを馬場はよく心得ていたと考えられる。

以上、オレンドルフ教授法の『日本文典初歩』と相似の点を見てきた。

オレンドルフ教授法は19世紀中葉にドイツから興り、外国語学習が盛んな世界の地域において大流行の教授法となった。日本においても1880年代に注目された。横浜の居留地において、19世紀後半に“Yokohama Dialect”と呼ばれるピジン日本語が出現し、半世紀に亘って使われたが、Hoffman Atkinson (1874)、Homoco僧正(1879)によって執筆されたとされる“Yokohama Dialect”の学習書も、オレンドルフ教授法を使用して執筆したと前書きにある<sup>(7)</sup>。実際にはオレンドルフ教授法を使用したとは考えられないピジン日本語ではあるが、当時、オレンドルフ教授法が一世を風靡していた状況がよく窺える。

馬場辰猪は国内にいたとき、江戸の福沢諭吉塾に入塾し英語を学び、また、長崎滞在の宣教師のフルベッキについて英語を学んだ。1870年イギリスに留学し、2回に亘り総計で約8年滞在した。オレンドルフ教授法が日本に入り、英語関係者のなかでさまざま取りざたされ、また、

欧州を席卷していた頃でもあるゆえに、馬場がオレンドルフ教授法を知悉していたことは大いにあり得ると考えられる。

オレンドルフ教授法に限らず、当時の文典の練習問題は問答法が多かったようであるが<sup>(8)</sup>、馬場も問答法を採用している。

#### 2.4 アストン『日本口語小文典』ならびにサトウ『会話篇』における例文との比較考察

次に同時代のアストン（1869, 1871）『日本口語小文典』における例文ならびにサトウ（1873）『会話篇』における例文を考察することにより、『日本文典初歩』における練習問題の例文の意義を探りたい。

『日本口語小文典』は原題“A Short Grammar of the Japanese Spoken Language”といい、1869年、長崎で初版刊行、1871年、ベルファストで第2版が刊行された。

特徴としては、現在の日本語教育における日本語教授法でも極く一般的に使われている動詞3分類法とほぼ同様の動詞分類法が使われている。

『日本口語小文典』は口語文法の説明に重点を置いていて、その使い方として例語や例文が載せられている。重心は文法説明であるから例語ないし例文を練習問題としては配置していない。そのためか、例語ないし例文は習得が易しいものを的確に挙げているとはいいがたく、例のための説明が更に必要ではないかと思われるような例語や例文が挙げられている。初版より第2版の方がその傾向が顕著である。例を挙げると、助詞waについて 初版では“Wa is a sort of definite article.”とあり、例文では次のようにある。

Tenki wa yoroshi ka? → Is the weather good?

Kono sakana wa takai ka? → Is this fish dear?

第2版では、“Wa is a distinctive or separative particle.”に続き、詳細な説明があった後“wa”に強調の意味を伴う例として、次のような例が挙げられている。

Akashi no ura wa. → What about the bay of Akashi?

Shiroi koto wa shiroi. → So far as whiteness goes, it is white.

(中略)

Tokaido no ninsoku wa kumosuke to iu. The Tokaido coolies are called kumosuke.

第2版における動詞の「～たり～たり」(frequentative form) を記述するのに、例文として以下を挙げている。

Oya ni kokorodzukai kaketari, oya wo nakasetari no fuko wa aratameta.

→ He reformed his unfilial conduct is constantly giving anxiety to his parents and making them weep.

Kono ame ga futtari yandari suru tenki wa ki ni iranai.

→ I don't like this weather, when it is always raining and leaving off raining.

第2版の例文はいずれも高度の解釈力が必要である。例語や例文は当該の文法項目を使って

できるだけ易しくその教授項目が習得できるように提出することがねらいであるゆえに、例文中の当該項目以外の箇所の文法や表現の理解がむずかしく、文全体が把握できないようでは例として不適切になる。アストンの『日本口語小文典』は、緻密で詳細な文法記述が優れているが、理解のため、ないしは日本語を習得し、運用するための教科書としては適切な練習例題に欠けているといえるであろう。

次に、サトウの『会話篇』の例文を考察する。

『会話篇』(1873)(原題“Kuaiwa Hen”)はサトウによって横浜から刊行された。『日本文典初歩』と同年に刊行された外国人日本語学習者のための文法書であり、教科書である。その頃の横浜居留地ではビジン性の極めて強い“Yokohama Dialect”と呼ばれる日本語が一般的に使われ、標準日本語を学ぶにも教えるにふさわしい教師がほとんど見付からなかった為に、サトウは非常な苦勞をして口語および文語日本語を習得した。その苦勞から、サトウは同僚のミットフォードのために1867年から1868年にかけて編纂したのが『会話篇』であった。『会話篇』の第1部はテーマや状況ごとに分類した対話から成っている。左側のページに日本語で、右側のページに英語で対訳が載せられている。第2部は第1部の会話篇に提出されている語彙と文法の説明書である。第1部はいわば対話の見本集であるが、例文が易から難へと配置されているわけではない。別稿<sup>(9)</sup>にも記したが1課におけるComing and Goingは40の例文から成っており、1. Kino kimashita. 2. Kino kita. 3. Ashita iko to omo. 4. Ashita iko ka to omo. 5. mo sukoshi nochi ui o ide nasai<sup>(10)</sup> 6. Ano onna wa sakujitsu ikimashita. 7. Kino itta. 8. Mairimashita ka.のように配置されている。1が丁寧体過去肯定形から始まっており、40例のどこにも基本形である「ます形」の丁寧体現在肯定形が出現していないのが特異である。1課：丁寧体過去肯定形、2課：普通体過去肯定形、3課：丁寧体現在否定形、4課：召使からの挨拶表現、5課：召使への罵り等から始まっており、豊富な日本語表現を紹介するのに成功してはいるが、教科書としては使いにくいと考えられる。『会話篇』も問答形式で成り立っている箇所が多いが、『日本文典初歩』のようなドリル式の基礎的な文法項目や語彙習得のための練習が施されておらず、また、文法項目の導入順序に難があるため、易から難を配慮した、積み上げ式の教科書ではないといえる。第2部の文法説明書は詳述されており、独習者にも分かりやすく懇切丁寧であり、動詞の分類も現在の日本語教育と同じ範疇で3グループに分類されているので、『会話篇』における難点は文法項目ならびに例題の提出順序であるといえる。

『日本文典初歩』において、丁寧体現在肯定形として例文がWatakusi wa ikimasuから始まっているのと比較すれば『会話篇』の提出順序は初心者練習のためというよりも、江戸口語の表現集と評価した方が適切かもしれない。

練習問題の視点から3者の日本語教科書を見ると、上述したようにアストンもサトウも豊かな日本語の知識を駆使して日本語教科書を作成したが、初心者のための極めて平易な練習を豊富に含んだ、積み上げ式入門書という意味では、『日本文典初歩』が最も実用であったと考えられる。



## 2.5 近代的ドリルへの指針―「繰り返し」練習問題

練習問題に提出されている日本語文は、英語から直訳した不自然な日本語文である点が特徴的である。XXVII 課から例文を挙げる。

### XXVII

1. Watakusi wa kono tokei wo haha ni okurimasu. 2. Anatagata wa sono tokei wo anata no tomodati ni okurimasu ka. 3. Watakusi domo wa kono tokei wo watakusi domo no musume ni okurimasu. 4. Watakusi wa tegami wo watakusi no haha ni okurimasu. 5. Sakuzitu watakusi wa tegami wo watakusi no haha kara uketorimasita. 6. Anata wa mainiti tegami wo anata no tomodati ni okurimasu ka. 7. Watakusi wa tegami wo watakusi no haha ni mainiti okurimasu. 8. Watakusi no segare ga watakusi ni konniti tegami wo okurimasita.

### IX

1. Watakusi wa kiodai wo motteimasu. 2. Watakusi wa musume wo motteimasu. 3. Anata wa sinsetuna tomodati wo motteimasu. 4. Watakusi no tomodati wa kireina musume wo motteimasu. 5. Anata no kiodai wa kireina musume wo motteimasu. 6. Kono musume wa sinsetuna tomodati wo motteimasu. 7. Sono tomodati wa sinsetuna kiodai wo motteimasu.

### X

1. My brother has a beautiful daughter. 2. Your friend has a kind brother. 3. That girl has a kind brother. 4. I have a beautiful daughter. 5. You have kind brothers. 6. I have kind friends. 7. That beautiful girl has a kind brother.

XXVIIの1は“watakusi no haha”とせず自然な文体であるが、2～8は代名詞と連体修飾格の格助詞を一々記し、日本語としては不自然である。1に自然な文体を書いたのは、馬場の自然な日本語が表出されたのであり、2以降を見ると、馬場は英語圏の外国人日本語学習者が理解しやすいように、あえて不自然に聞こえる直訳調の日本語を教えているのである。

また、「兄弟を持っています」という表現も日本語としては不自然な表現であり、更に日本語では兄弟といっても、兄か弟か長幼を明確にする場合が多いと思われるが、英語の表現のbrotherと同じように日本語でも「兄弟」としている。

馬場辰猪は江戸留学を境にして母語である日本語よりも英語による思考や英語での執筆に慣れ親しんだ人である。馬場は『日本文典初歩』を記述するときには英語で考えながら執筆したのではないと思われる。

『日本文典初歩』の執筆動機として、馬場が序文に書いているように、森有礼の簡略英語国語化論に対する反駁および口語日本語で日本国民を教育することの可能性の証明のほかに、第一の目的として、英語母語話者に口語日本語を紹介する大きな目的があった。馬場は初めから英語母語話者の日本語学習の便宜を考えながら執筆したのであろうことが、上記引用の練習問題XXVII, IX, Xからもわかる。

馬場が『日本文典初歩』を執筆するにあたり、自身が江戸に留学したときに使用した『英吉利文典』の影響を受けたという説がある<sup>(11)</sup>が、教科書としての両者の構成、語彙レベル、易から難への導入方法、練習問題の性格等を考えると、品詞の分類以外は影響を受けたとは考えられない。他日を期して考察したいが、考えるに『英吉利文典』は外国人英語学習者のために編纂された教科書ではなく、英語母語話者のために、国語としての英語の成り立ちを講釈する読み物であったのではないか。しかし、日本人英語学習者にとってはこのように適切な教科書がなかったなかで、日本人は『英吉利文典』を教科書として英語を学ばざるを得ないのだった。

例を挙げると、第1課はオレンドルフ教授法のような同音の単語を複数提出しての発音の説明もなく、提出単語の説明もなく、理解の容易な短文から段階的に入るのでもなく、唐突に関係代名詞を伴う構造的にも理念的にも複雑な文が提出されている。馬場は、「A, B, Cを教えずに、いきなりこの本を教えるのであった。」<sup>(12)</sup>と述べている。

Q. What is language ?

A. Language consists of articulate or spoken sounds which express thoughts.

馬場が初めて英語を学んだ『英吉利文典』は教授法の観点から考察するならば、外国人学習者の教科書として使うには不適切な本であったといわねばならない。第1課の冒頭の例文はごく短く構造の平易な文を紹介しなければならぬのに、思想も抽象的で難しく、関係代名詞を持つ複雑な枠組みの文を提出しているために、語学の教科書としては適切ではない。

このように教授法も教科書も教師も開発されていない中、外国語を学ぶのであるから理解の手段として学習者が頼るものは、母語文法の順序以外になかったことがわかる。漢文返り点方式の直訳以外に頼るものがなかったゆえ、逐語訳の直訳に頼ったのである。それ以外には外国語を理解する手段がなかったのである。

馬場が『英吉利文典』を学んだ翌年、『挿訳英吉利文典』（1867）が刊行され、学習者は漢文返り点方式で一語一句、手堅く順序を付けて勉強することができるようになる。しかし、馬場は最も不利な状況下で英語を習得したことになる。

馬場自身の不利な学習環境ということを考えると、分かりやすい教科書としての構成という面で、『英吉利文典』から何も恩恵を受けなかった馬場が、今日の『にほんごのきそ』（1972）にも通ずる易から難へ配列した「繰り返し」練習問題を作成しえたのである。稿者は「繰り返し」練習問題においてオレンドルフの影響を見る。

## 2.6 外国人日本語学習者のための教科書としての近代性と批判点

「繰り返し」練習の強調は『日本文典初歩』の一つの著しい特徴である。項目の配列は易から難への配列であり、基本的な易しいごく限られた語彙を使って何回も口頭で類似の短文を繰り返して練習する。現在肯定形、否定形、疑問形、過去肯定形、過去否定形等を組み合わせ、繰

り返し満遍なく練習できるようにしてある。

XXVに、3. Watakusi domo wa mainiti kono hito wo mimasu.のような不自然な和文が提出されているが、XLVに2. Anata wa mainichi kono hito ni aimasu ka. 3. Watakusi wa sono hito ni mainiti aimasu.が提出されている。学習者は易から難へ、「毎日、この人を見ます」という便宜上の入門レベルでの表現から、「毎日、この人に会います」という自然な表現を直ぐに獲得するようになるのである。助数詞についても、XXXIXでは5. Anata no niwa ni ki ga futatu gozarimasu. 9. Watakusi wa kosikake wo futatu motte imasu.のような入門者の日本語を練習させているが、XLIIIの9. Anata no ike ni kamo ga samba orimasita. 11. Anata no niwa ni yamagara ga si wa orimasu. 12. Koncho watakusi wa suzume wo zu ni wa mimasita.になると、適切な助数詞を使った自然な日本語へと練習を経て移行していけるように導いていることが分る。XLIXでは5. Anata no tomodati wa sake wo nomimasu ka. 6. Watakusi no tomodati wa midu wo nomimasu. 7. Watakusi domo wa niku wo takusan tabemasita.が提出されており、これらの例文は「domo」を「tachi」に代えたと、そのまま、1972年に発行された文型（文法）積み上げ式のシラバスで成っている教科書『にほんごのきそ』の第6課の文型になる。前掲LXXVIIの例文1、2は同4課の文型であるし、同例文3、4は同6課の、XXVIIの例文は同7課の文型である。

『にほんごのきそ』は、その不自然な日本語が実際の場面で応用が利かないであるとか、練習が、成人を対象にしているにも拘らず子どもじみているとか、意味の無いドリルであるとか、ドリルに飽きが生じるであるといった点が後に批判された。

『日本文典初歩』は、『にほんごのきそ』より100年も前になった教科書で文法説明やローマ字表記にも誤りが見られ、『にほんごのきそ』とは比較すべきではないが、練習問題のありかただけに言及するなら相似点が見られる。ここに「繰り返し」練習の理念が見られ、ねらいとするところは同様であったと評価され、近代性が見られる。習得促成のための口頭練習教科書であったことに共通の長所と短所が見られるのである。

### 3. おわりに

最後に、『日本文典初歩』を使って日本語を習得した外国人学習者、カーメン・ブラッカーに触れたい。ブラッカーはロンドンにおいて1937年、12歳のときに母に誕生日プレゼントとして「大人向きの栗色の表紙の小さな本」である、『日本文典初歩』を贈られて日本語の学習を始める。ブラッカーが母に買ってもらったのは第3版（1904）であった。ブラッカーが後年、日本研究者になったのは幼少時に『日本文典初歩』に触発されたゆえで、「多くの歳月が経った今、読み返してみて、感謝の念と愛情がこみ上げてくる」と記している。「馬場のGrammarで実際に日本語を学んだ最後の世代の一人かもしれない」とも述べている<sup>(13)</sup>。初版で学習し、第3版に序文を記した日本研究者にアーサー・ディオジー、第2版（1888、米国にて刊行）で学習した人に新渡戸真理子がいる。

第3版は馬場の没後、在英日本大使館の浮田郷次により少々改訂されて出版されたものである。ブラッカーは第3版の練習問題において「蛇使い」「手妻師（手品師）」「軽業師」等の「突飛な単語」の出現や、光秀と秀吉との戦い場面の訳等、実用的ではない内容があるということに関して、ブラッカーが幼少であったため疑問を抱くことは思いも寄らなかったと記している<sup>(14)</sup>。

時を経て改訂版が英米で出版されるということ、特に死後もなお、他人が改訂を入れて出版するということは、英米における『日本文典初歩』の需要の高さを示すものである。

馬場は日本語、英語ともに分りやすい口語を用いた弁論術に極めて優れた人であった<sup>(15)</sup> ゆえに、口語日本語の習得法を具体的に記述することができたのであろう。

## 【註】

(1) 海外技術者研修協会編、海外技術者研修調査会発行。文型（文法）積み上げ法を中心とした教科書構成の分りやすさ、使いやすさで一般にも広く流布し、その後の『しんにほんごのきそ』『みんなのほんご』を生む礎となった。

(2) 金沢朱美（2008b）「馬場辰猪 “An Elementary Grammar of the Japanese Language” 一動詞分類の特徴ならびに出現背景についての考察を中心に」『日中学術研究誌』2号

(3) ヘレン・ボールハチェット（1988）「馬場辰猪の英文」『馬場辰猪全集』月報4 岩波書店

(4) 金沢朱美（2006）「オレンドルフ教授法の受容の考察—井上勤ならびに岡倉由三郎の受容を中心に—」『目白大学人文学研究』第3号

金沢朱美（2007）「岡倉由三郎におけるオレンドルフ教授法の受容の考察」『日本語と日本文学』第44号 筑波大学国語国文学会

(5) A. P. R. Howatt (1984) “A History of English Language Teaching” Oxford University Press p.143

(6) 同上、p.143

(7) Hoffman Atkinson (1874) “The Exercises in the Yokohama Dialect”, Bishop of Homoco (1879) “The Exercises in the Yokohama Dialect”

金沢朱美（2003、2005）「幕末明治期の居留地における日本語についての考察—Yokohama Dialectを中心に—」『目白大学人文学部紀要』第9号、『日本語学論説資料』第40巻、論説資料保存会再掲参照。

(8) 古田東朔（1958）『日本文典に及ぼした洋文典の影響：特に明治前期における』『文芸と思想』16巻 福岡女子大学

(9) アーネスト・サトウ（1873）『会話篇』の序文および第2部の動詞活用表の前に、「第2部の文法の記述に関してはアストンの『日本口語小文典』（1869）から、その理論を援用し、非常に多くを負っている」と述べている。

金沢朱美（2008a）「アーネスト・サトウと日本語研究—『会話篇』を中心に—」『目白大学人文学研究』第4号参照。

(10) サトウが『会話篇』の正誤表で誤植を指摘している。uiはieの誤りである。

(11) 日野資純（1965）「馬場辰猪の『日本文典初歩』と、それに影響を与えた英文典」『静岡大学人文学部人文学科研究報告』16号

古田東朔（1958）「日本文典に及ぼした洋文典の影響：特に明治前期における」『文芸と思想』16、福岡女子大学

- (12) 馬場辰猪著、馬場孤蝶・西田長寿訳（1982）「馬場辰猪自叙伝」『日本人の自伝2』平凡社
- (13) カーメン・ブラッカー（1988）「馬場辰猪『日本語文典』を思う」『馬場辰猪全集』第3巻 月報  
3 岩波書店
- (14) 同上
- (15) 前掲、金沢（2008b）